

---

# アポカリユプシス

あかね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アポカリユプシス

### 【Nコード】

N2300B

### 【作者名】

あかね

### 【あらすじ】

ある時、神様は人間に陥れられてしまいました。神様は復讐を考えました。もう人間は滅ぼしてしまおう。苦しみながら死んでいつてもらおう。しかし、もはや人間もやられっぱなしではありません。精一杯抵抗します。人間も反抗の手段を様々考えました。なんとも驚くべき事ですが、もうこうなっては、どちらが滅ぼされるか、全くわからなくなってきました。・・・ってゆるーお話しです。詳しくは本編で

## プロローグ【血のクリスマス】

2017年、クリスマスに成り立ての深夜。

ニューヨークの中心部、きらびやかに飾りつけられた巨大なツリーの周りで、所狭しと、恋人達が聖なる夜を祝っている。

年に一度の事ではあるが、それでもありふれて感じる平和な光景。

そこにいる誰もが、これからも永遠に続くであろう無償の平和を信じて止まないでいた。

瞬間。

2

夜を照らす紅い太陽。女神像の真上、はるか彼方にも眩しく、狂おしく、現れた。

紅い光りに導かれるように、全ての視線が、その紅に集まっていく。

あまりに突然であまりに理解し難い目前の存在が、人々の思考すら停めてしまったのだろうか。

不思議とざわめきは聞こえない。

街灯とイルミネーションが閃く紅い闇を、不吉な静寂が支配する。

空の黒を切り裂く紅い一線。

沈黙は破られた。

とてつもなく激しい轟音と共に、自由の象徴は、一瞬で崩れさり、その周囲一帯を強烈な熱波が燃やし尽くした。

建物は放心円状にどんどん破壊され、人はことごとく、死んだ。

ある人は断末魔と共に臓器まで焦がし、ある人は四肢を無惨にまき散らし、ある人は灰すら残さず、文字通り消え失せた。

そして、ことごとく、死んだ。

かつて、合衆国のシンボルとして聳え建っていた女神像は跡形もなく、代わりに、半径にして1キロメートル近い虚無の空間が地のはるか底まで続いている。

たった数秒の出来事だった。

その数秒で、合衆国の巨大都市は廃墟と化した。自由を司っていた大都会は、瓦礫で埋葬された憎悪の象徴として生まれ変わったのだ。

そして

「 したがって、我々アメリカ合衆国はこの悲劇を決して忘れる事はない。我々をはじめ世界中の人々がこの悲劇を許しはしない。断罪の剣を右手に、正義の盾を左手に、悪に屈せず立ち向かう事を、今、ここに誓う！」

新人類と旧人類との壮絶な戦争の幕が切って落とされた。

## 第一話【鎖島竜二】

メディアを中心に、ニューヨークの悲劇は『血のクリスマス』と呼ばれるようになり、人々の記憶に強く刻み込まれた。

ニューヨークを還付無きまでに破壊した紅い光線については、米軍が開発していた対巨大隕石迎撃用レーザー兵器『メシア』に酷似しており、当初、なんらかの実験失敗か、悲劇的事故ではないかと、推論が飛びかっていた。

しばらくして、それが絶対的に否定されると、今度はイスラエルや北朝鮮によるテロではないか、よもや、宇宙人による襲撃ではないかという馬鹿げた話しにまで及んだ。

ホワイトハウスの発表は世間が思っていたよりもはるかに早く、また、その内容は、どこぞのコメンテーターが言いたい放題口にしていたモノと負けず劣らずの信じ難い発表であった。

新人類『ルシファー』の存在と、その恐るべき目的。

世界中を恐怖のどん底に突き落とした。

『ルシファール』は旧人類、つまり我々とは比べるべくもない、身体能力の高さと、冷血さをもち、さらにあの紅い光りに代表される未知の殺傷技術をも持っている。

そして、本当に驚嘆すべきはその目的。

奴らは我々を絶滅させるつもりだ

いうまでもなく、ホワイトハウスの記者達をはじめ、世界中を大混乱に陥れた。

大統領は一切の質問をうけず、最後に一言だけ付け加えた。

「これは戦争です。かつてなかったほど凄惨を極める戦いになるでしょう。しかし、五十億の同志達が、一丸となれば、恐れることは何もありません。今日こそ全人類が手ん取り合う時です。勝利をおさめ、平和を取り戻すために、今、すべての力を一つに！」



3年の年月が流れた。

ホワイトハウスの演説から、すぐに世界政府が立ち上げられ、ルシファーとの戦争の準備が刻一刻と整い始めていた。

不気味なのは、あれから3年、ルシファー側に目立った動きが見られないことだ。

世界各地でルシファーによる凶悪事件が起こる程度。

その度、討伐も順調にこなすが、旧人類側も根本的な勝利にはこぎつけられない。

きりのないイタチごっこが繰り返されていた。

2020年1月、日本、兵庫県西宮市郊外。

雪が舞う。

血が舞う。

首が舞う。

漆黒のスーツに骸のネクタイ。

手は何やら趣味の悪い指輪でゴツゴツと装飾している。

逆立てた黒髪に、釣り上がった一重の眼。

オニキスのピアスが全身の黒を一層際立たせる。

雪の降り頻る中、殺戮の刃を振るう黒い幻影が鮮やかに舞踊っていた。

たったの一人で数十人のルシファーを次々と斬り殺してゆく。

一滴も返り血を浴びてはいない。

代わりに、降り積もった雪の白が赤に変わる

瞬く間に、ルシファーは残り一人になっていた。

たった一人になっても恐怖はないのか、それでも全く怯む様子はない。

斬りかかる。

かわす。

「おおおい。てめえら、殺りがいがねえぞお。少しは楽しませるよ」

不敵に笑いながら、首を傾げて見せる黒い男。

構わず、刀を振るい続けるルシファー。

かわし続ける。

「……つまらねえ」

刹那、首が胴と斬り離され、赤い噴水が宙に舞った。  
翻って、雨になり、降り注ぐ。

染まる余地の無い程、すでに真っ赤に染まった雪のアスファルト。  
その中央に男は立つ。

刃の血を掃うと、口の端を不気味に吊り上げて、歪んだ笑みをみせた。

自信に溢れるその表情。

口調はさらに、残虐になる

「強え……。ハハハ。俺は強え！誰にも負けねえ。どいつもこいつもブツ殺してやる！！ハハハハハ！」

……ルシファアの生命力は人間のソレとは比較にならないほどに強い。

首だけになっても、数分は生きていられるし、数秒なら意識もはつきりしている。

地に落ちた瞳に写るは鬼の化身。

逆立った黒髪が角のように見えた。



時刻はすでに零時を回っていた。

人里離れた山上の駐車場で、血濡れの雪の側、フェンスにもたれて夜の闇に佇む。

携帯電話を取り出し、操作。

青く発行するディスプレイが鎖島の顔を妖しく照らしている。

メールを送信した。

しばらくして、遠くから、雪を削るタイヤの音が聞こえた。  
段々と近くなる。

夜に溶け込むような黒塗りの外車が三台。

先頭の一台から、スーツの男が歩み寄ってくる。背筋を真っ直ぐに伸ばしたがっちりした体型で、鎖島とは対照的に、いかにも軍人らしい雰囲気を漂わせている。

「鎖島隊長！お待たせいたしました！お迎えにあがりました。」

男の横を素通りして車に近づく鎖島。

「コートおかけいたします！」

鎖島は面倒臭そうに、それをつきかえした。

「……いちいちうるせえな。俺が寒いわけねえだろうが。」  
姿勢を直して、表情を固くする男。

「しっ、失礼致しましたあ！」

鎖島は車に乗り込んで、扉を閉めた。

「……」

黒塗りの窓を半ばまで降ろして、外の男に視線を送る。

「……てめえ、新人か？……サンキューな。後片付けは任せませ。」

驚いた表情で、さらにカチンコチンの男。

「はっ、はい！ありがとうございます！」「苦労様でしたあ！！」

「…………おづ。」

窓を閉じて走り出した。

「…………いつになく優しいなあ。竜二。」

今度は鎖島が驚いた表情を見せる。



「吉村さん?!・・・こんなところで何やってんすか?今度は運転手に転職つすか?」

一転、ケタケタと笑いながら、話す鎖島。

なにやら吉村も嬉しそうに笑みを浮かべている。

「偉くなったねえオマエも。・・・まあいいや。てゆーか、どうだ?調子は?」

・・・フと外を見ると、深夜にも関わらず賑わいを見せる西宮の都心部。学生だろうか?若者達が笑いながら街を闊歩している。

複雑な気持ちでソレをながめながら、口を開く鎖島。

「はっ!楽勝つスよ。弱えのなんの。てゆーか百でも千でもまとめてかかってきてくれねえもんすかねえ。」

「そうか。それは心強い限りだな。・・・実はまあ、その事で報告があんだよ。今日は」

怪訝な表情の鎖島。

沈黙によって、質問を投げかける。

「・・・まあ、他の連中も集まってるしな。詳しい事は着いてからでいいか。少し急ぐぞ。」

アクセルを強く踏んだ。

段々と速度が上がる。

裕に法定速度を越えて、さらに加速してゆく。

黒塗りの高級外車には似つかわしくないほど、・・・いや、通常では考えられない程のスピードでハイウェイをひた走る。

周りの自動車は、時を止めたように視界の後ろに消えていった。

さらに、スピードは上がる。

会話の無い車内。

かれこれ30分は経っただろうか。

鎖島は相も変わらず、窓の外を眺めたままだ。

吉村が声をかけた。

「もう着くぞ。少しは寝られたか？」

自嘲気味に笑う鎖島。  
肩をすくめて答える。

「もう半月近く寝てないっすよ。」

「・・・そうか。そう、だったな。」

吉村も罰が悪そうに頭をかいた。

「吉村さんが気にする事じゃあないっすよ。ただ俺も、いよいよ人間って感じじゃないなあって。・・・まあ、これはこれでそれなりに楽しんではいらんすけどね。」

満面の笑みを浮かべる鎖島。  
かえって不気味に思える。

吉村も悲しく微笑んだ。

「・・・着いたぜ。」

眼前には、超高層の摩天楼が聳え立っている。

雪の霽と、夜の闇で最上階は完全に隠れて、見えない。

先の見えない闇に包まれ頂き。

鎖島にとつても、吉村にとつても、それが、自分達の行く末の暗がりを暗示しているように思えてならなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2300b/>

---

アポカリュプシス

2010年12月12日02時40分発行